Vol.2020-DC-118 No.1
2020/10/2

南イタリアの連帯ツーリズムにおけるコミュニケーションネットワーク

中挾知延子 [1]

概要：2016 年以降，筆者は南イタリアの小さな村リアーチェで社会ネットワークの調査研究をしている．多文化共生社会で有名なリアーチェは，持続可能な共生社会のための連帯ツーリズムを進めてきたが，近隣の村カミーニに比べるとあまりうまくいっていない．そこで，社会ネットワークでのバランス理論を用いて，この村のコミュニケーションネットワークについて原因の分析を試みたのでその報告を行う．

キーワード：コミュニケーションネットワーク，バランス理論，連帯ツーリズム，南イタリア，リアーチェ

Communication Network on Solidarity Tourism in Southern Italy

CHIEKO NAKABASAMI[†1]

Abstract: Since 2016, the author has been researching on social networks in Riace, a small village in Southern Italy. Riace is famous for multicultural inclusive society and has been investing ‘solidarity tourism’ in sustainable regional development. However, this solidarity tourism project is not going very well compared with Camini, a neighboring village which follows Riace in building a multicultural society. In this report, the author is trying to find a possible solution for answering why solidarity tourism is not working well in Riace using ‘balance theory’ on social networks in network science field.

Keywords: Social networks, Balance theory, Solidarity Tourism, Southern Italy, Riace

1. はじめに

イタリア南部カラブリア州にある，イオニア海に面した古い歴史を持つコムーネ[a]であるリアーチェ（Riace）（図 1）は，20 世紀末には人口が 400 人程にまで減少し，高齢者も多く消滅の危機に瀕していた．しかし，地元住民とアフリカやアジアからの移民（難民も含む）との共生に活路を求め，コムーネの首長であるドメニコ・ルカーノ氏を中心に 20 年間に及ぶ努力の結果，人口は約 6 倍になり，多くの住民が幸せであると答える多文化共生社会を実現させている[1][2]．筆者は，どのようなメカニズムによって共生社会がうまく機能しているのかについて興味を持ち，共生社会の相互性と双方向性[3]に着目して，2016 年から現在までリアーチェでフィールドワークを行ってきている．相互性とは，住民間におけるお互いの文化の違いを尊重した物理面・精神面の協力やサポートであり，双方向性とは，共同体の公的サービス・私的サポート両面にわたるさまざまな場面で，文化の違いで差別されずに役割分担がなされていることである．

本稿では，リアーチェのような多文化共生社会で，住民がお互いの絆をより強めるとともに経済効果も期待できる連帯ツーリズム（Solidarity Tourism）という観光形態に着目し，その持続可能性を探っている．リアーチェで繰り広げられている多文化共生社会のしくみはリアーチェモデルと呼ばれ[4]，周囲のコムーネにも好影響を与えている．

リアーチェの隣に位置する小さなコムーネのカミーニ（Camini）では，リアーチェモデルに倣って共生社会を実現させており，連帯ツーリズムではリアーチェの先を行くという逆転現象も起きている．リアーチェは共生社会モデルの発端であるにもかかわらず，連帯ツーリズムは期待したよりも進んでいない．本稿ではこれについてカミーニと対照させることで，なぜリアーチェでは順調に進まないのかについて，社会ネットワークにおけるバランス理論[5]を用いてその原因を考察する．

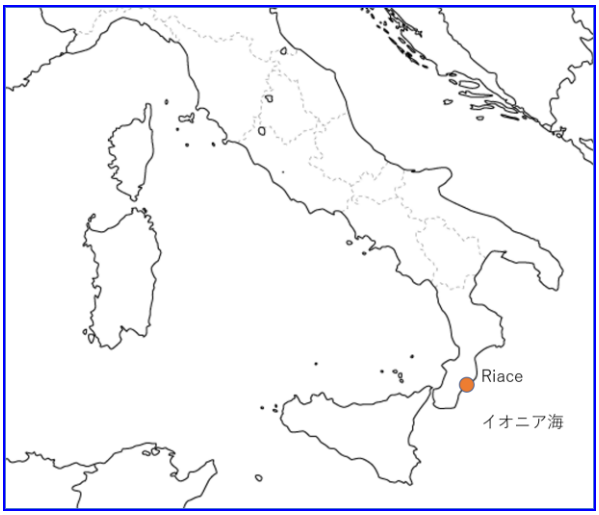

図 1　リアーチェの位置
（フリー素材地図を筆者により加工）

1 東洋大学国際観光学部
Department of International Tourism Management, Toyo University

a) イタリアでは区市町村というカテゴリはなく，大きさに関係なくすべてコムーネ（comune）という基礎自治体で構成されている．

ⓒ2020 Information Processing Society of Japan

2. 連帯ツーリズム

2004 年から 2018 年までリアーチェコムーネの首長であったドメニコ・ルカーノ氏は，2010 年に米国フォーチュン誌で世界に影響を与える 50 人のリーダーに名前を連ねた人物で，移民の受け入れを積極的に行ってリアーチェを多文化共生社会として改革を行い，近い将来消滅してしまうのではと懸念されていたリアーチェを活気あるコミュニティに蘇らせた有名人である．ルカーノ首長の強いリーダーシップの下，リアーチェモデルの一部として考えたのが，「連帯ツーリズム（Tourismo Solidale）」である．連帯ツーリズムとは, 20 世紀末から 21 世紀初頭にかけて提案され，現在も多様な形が現れつつ広がりを見せるオルターナティブ・ツーリズムの一つである[6]．オルターナティブ・ツーリズムは，マスツーリズムに替わる観光形態である．マスツーリズムとは，第 2 次世界大戦後の経済発展を背景に，それまで富裕層に限られていた観光旅行が，幅広く大衆にまで拡大した現象を指す. 1950 年代に米国で現れ, その後，欧州に広まった[b]．パッケージツアーもその一つであり，これまで個人で旅行することが大きなハードルであった多くの人々にも，団体であることと添乗員がいるので安心という観光旅行が提供された．

マスツーリズムは，観光旅行をより多くの人々に一般化させたということでは意義があるが，一方で観光客が満足することが優先されるために，訪れた土地の人々の従来の生活文化や伝統を歪めたり，一度に多くの人々が押し寄せることで手つかずの自然を破壊したり，ゴミのポイ捨てなどモラルのない行動が散見されるといった環境問題が起きており，持続可能な観光とは言い難い．2015 年には国連が SDGs（持続可能な開発目標）[c]を打ち出すなど，持続可能でよりよい世界を目指す地球規模での変革が求められている時代において逆行しているといっても過言ではなかろう．

連帯ツーリズムは次のような目的を持っている[7].

- 訪問客とホスト住民[d]との連帯を築く．
- 訪問客とホスト住民とで公平・共有・尊敬をベースに相互理解と関係を築く．
- ホストコミュニティ[e]の自給自足と自己決定権をサポートする．
- ホストコミュニティの経済・文化・社会面の利益を最大化する．

連帯ツーリズムは，このようなコンセプトに基づいた観光形態であり，具体的にどのようなことをするのかについては，ホスト住民がどのようなことを訪問客と一緒に協働してほしいのかに依るが，例えば，以下のようなことが考えられる．ここでは，定住した移民をホスト住民に含めることもできる．

- 訪問客がホスト住民から過去に歩んできた話を聞いて共有する．
- 訪問地の環境保全活動を手伝う．
- ホスト住民の生活改善につながる活動を手伝う．例えば，子供の世話，学校の手伝いなど．

連帯ツーリズムでは，活動はあくまでも自発的なものである．また，ボランティア活動をするため滞在期間は少なくとも 2 週間以上であり，長いと年単位での滞在もありうる．そのため休日にはボランティアたちは周辺地域に出かけて広域の文化を体験できる．さらに，ボランティアは学生など若い世代が多く，地域がにぎやかになって活気が戻ることも期待できる．

ルカーノ氏はリアーチェモデルの中に連帯ツーリズムを盛り込んでいるが，筆者の現地調査では，リアーチェで連帯ツーリズムが活発に展開されているとは感じられない．現地の住民にインタビューを行ったが，連帯ツーリズムの話は出てこなかった. 一方で, カミーニに立ち寄った際に，連帯ツーリズムがかなり機能している印象を受けた．カミーニは元々リアーチェに倣ってリアーチェモデルを実践した，多文化共生社会では後発のコムーネであるが，連帯ツーリズムにおいてはリアーチェの先を進んでいる．どのような要因で，リアーチェとカミーニが両方とも連帯ツーリズムを進めようとしているにもかかわらず，このような温度差があるのか疑問を抱いた．そこで，カミーニでの連帯ツーリズムの状況を調べて，そこからリアーチェと比較できる項目を見出し，その内容が連帯ツーリズムの運営にどのように影響しているのかについて，社会ネットワークの観点から考察することにした．

3. カミーニでの連帯ツーリズム

カミーニはリアーチェの北に隣接する人口 780 人ほどの小さなコムーネである．現地に着いての第一印象は，人がまばらで坂道の多い南イタリアではごく普通に見かける小さな村であった．連帯ツーリズムが果たしてここで成功を収めているのは本当なのか一見するだけではわからなかった．カミーニにある唯一のバール[f]で，面会の約束をしていた活動団体をよく知るイタリア人協力者の話を聞くことで，連帯ツーリズムについて多くの示唆を得ることができた．

カミーニでは 2016 年以降，ユンギ・ムンドゥ（Jungi

b) JTB 総合研究所．観光用語集．https://www.tourism.jp/tourism-database/glossary/mass-tourism/（参照 2020-08-04）.
c) 例えば国際連合広報センター．https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/ (参照 2020-08-04).
d) 来訪者を迎え入れるその土地の住民. .
e) 来訪者を迎え入れるその土地のコミュニティ．

f) bar. イタリアにおけるカフェやレストラン．

Mundu）という連帯ツーリズムのプロジェクトが展開されている．2011 年に社会貢献活動組織 EUROCOOP[g]がカミーニに来て，難民を受け入れてホスト住民と協働していくことで，コムーネの経済・社会・文化などあらゆる面での地域再生をミッションに活動を始めた[h]．ユンギ・ムンドゥは，英語で“Join the World”という意味で，国籍を越えてあらゆる人々を迎え入れるカミーニにある事務所の名前であり，カミーニではユンギ・ムンドゥという名前は，団体や活動全体を象徴するものになっている．連帯ツーリズムプロジェクトでは，国際ボランティアを迎え入れて，移民（難民を含む）とホスト住民とで協働している．2018 年には年間を通じて 102 名の若者ボランティアが世界中から集まっている．ユンギ・ムンドゥのスタッフは，専門家集団とカミーニで生まれ育った若者で構成されており，プロジェクトマネージャー・アートディレクター・イベントオーガナイザー・語学教師・写真家・心理カウンセラーなど多彩な専門分野を持っている．ボランティアたちは，村に散在する宿泊施設に泊まって，バールでの 3 食付きで 1 日 25 ユーロ払う．宿泊施設は空き家をリノベーションしたものであり，中も見せてもらったが，無線 LAN が完備され，台所やシャワールームなどの水回りも最新設備が施され，2 階のバルコニーからは田園風景と村の家々が一望できる数人がシェアできるアパートで，何も知らない人が見たらリゾートにあるアパートホテルと思うにちがいない十分な設備を持つものであった．カミーニにおける主な活動としては，移民の小さな子供の世話，学校での勉強の補助や，民芸品を制作して販売するほか，村に遍在する壁に，多文化共生についてのペイントをするなどを行っている．滞在期間は短期から長期と幅が広い．カミーニでの現地調査では，連帯ツーリズムが成功している様子が分かった貴重なものであった．

4. 社会ネットワークにおけるバランス理論からの考察

4.1 バランス理論

リアーチェとカミーニでの調査で得られた知見から，社会ネットワークで論じられる，ネットワークの構造的バランスにおける「バランス理論（Balance Theory）」を用いて考察を行う．バランス理論は，社会心理学者 Heider が 1940 年代に提唱したものであり[5]，1950 年代になって，Cartwright と Harary によって理論化され[8][9]，以降，例えば Davis[10]をはじめ，多くの応用研究がある．バランス理論は，図 2 で説明すると次のようになる[11]．3 つのノード（頂点）A，B，C がすべて結ばれたネットワークで，それらがお互いに知っている人間としたとき，それらのエッジ（辺）に＋と－の記号を付す．例えば A と B のエッジが＋であるときは「A と B は友人」，－であるときは「A と B は敵」という意味を持つ．

図 2 にあるように，4 つのパタンが考えられ，バランス理論では，(1) と (2) が「バランスがとれている」，(3) と (4) が「バランスがとれていない（アンバランス）」の状態であるとする．ここでネットワークはアンバランスな状態を嫌ってバランスのとれた状態になっていくといわれている．4 つのネットワークを見ていくと，(1) は 3 人とも互いに友人で一番自然で好ましい関係であり，(2) は A と B は友人であるが，どちらも共通の敵 C を持っている．(1) も (2) も社会においてはよく見られる関係で，3 者にとってお互いに安定しているためネットワークとしてバランスがとれているという．一方で，(3) は A と B，A と C はそれぞれ友人であるが，B と C は敵であり，3 者間にはストレスや緊張があって不安定な関係のためネットワークとしてアンバランスであるという．そのため，A は B と C を敵から友人同士にしようとしたり（BC 間を＋にする），逆に A は B か C のどちらかを敵にしてしまう（AB 間か AC 間を－）といった，バランスがとれるようにネットワークは変化していくという．(4) では，ABC ともそれぞれ敵であり，お互いに反目し合って緊張感があり不安定である．このとき 3 人のうち 2 人が利害のあるなしにかかわらず結びついて友人になり，3 つの－から 1 つを＋にすることで，(2) のようなバランスのとれたネットワークになっていくといわれている．数学的に説明すると，3 つのノードのネットワークにおいて，エッジのサインが＋か－のとき，すべてのサインの積が＋のときにネットワークはバランスがとれていて，－のときにアンバランスであるという．

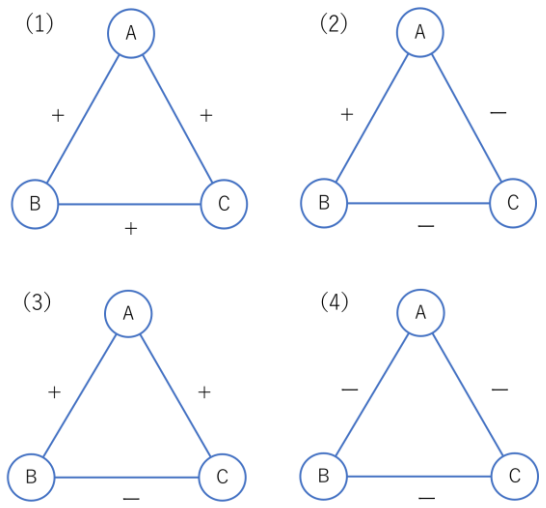

図 2　3 ノードのサイン付きネットワーク
（文献[11], p.121 を基に筆者作成）

g) 正式には EUROCOOP Servizi Società Cooperativa Sociale と称する NPO である．
h) ユンギ・ムンドゥは連帯ツーリズムのみを行っているわけではなく，社会から排除されがちな若者を健康面から支援するプロジェクトも行っている．詳しい情報は ttps://www.eurocoopcamini.com/docs/pif.pdf を参照．

ⓒ2020 Information Processing Society of Japan

4.2 リアーチェにおける社会ネットワークの 3 つのノード

リアーチェでの調査から，連帯ツーリズムに関わる人々を立場によって 3 つに設定して，前節で述べた 3 つのノードに割り当てることにした．3 つの立場は，以下のようになる．ここでは各ノードは以下の 3 つの立場に対応づける．

A：移民定住支援を施すグループ
B：移民の住民
C：ホスト住民

これら ABC のノードを結んで，サイン付きネットワークをリアーチェ及びカミーニにあてはめると，2 つのコムーネの違いは，A のみで，リアーチェではルカーノ氏，カミーニではユンギ・ムンドゥになる．リアーチェにおいては，強いリーダーシップを発揮しているルカーノ氏で代表すれば十分であると判断した．図 3 に 2 つのコムーネにおける 3 ノードネットワークの遷移を示す．

図 3 について，現地でのインタビューの知見も取り入れながら説明する．リアーチェではルカーノ氏がコムーネの長となり移民定住政策に乗り出したときは，移民の受け入れに戸惑うホスト住民も少なからずいた（図 3 の①）．時間が経つにつれて，ホスト住民と移民をつなぐ方策を次々に打ち出すルカーノ氏のリーダーシップも十二分に発揮され，その中には連帯ツーリズムも軌道に乗せようと進められていた（②）．このころリアーチェはイタリア全土のみならずヨーロッパ中に多文化共生に成功した場所としてメディアの露出も多く，その名前を轟かせていた．

しかし，以前からルカーノ氏には政敵がおり，その人物はリアーチェ・マリーナ地区を基盤にしていた．リアーチェは大きく分けて、イオニア海沿岸に面するリアーチェ・マリーナ地区と，山道を上った丘の頂上からの斜面に広がるリアーチェ･スペリオーレ地区の 2 つで成り立っている．丘の上のスペリオーレ地区とマリーナ地区との政治的な確執が 2017 年以降表面化してきて，ルカーノ氏とホスト住民とが反目しているとはいえないものの，ルカーノ氏に親密でサポートを惜しまない人々とそうでない人々が混在している（③）．③のネットワークは，バランス理論からはアンバランスな状態で，バランスのとれる状態に遷移する傾向があるとされ，その後としてⓍかⓎのネットワークが考えられる．A と B は移民をサポートする側とされる側であるので，このエッジが－になることは考えにくい．Ⓧはルカーノ氏とホスト住民との関係が修復されて，3 ノードとも＋になる共生社会としては一番良い形であり，Ⓨは移民とホスト住民も疎遠になって，ホスト住民が知らないところで移民定住支援が行われている状態で，これは共生社会の体を成していない．これでは連帯ツーリズムがうまく機能することは不可能である．

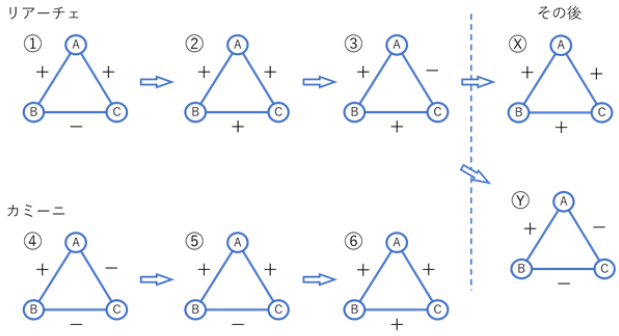

図 3　リアーチェとカミーニの社会ネットワークの遷移
（筆者作成）

また，ここでコムーネの執行部にも変化がおき，ルカーノ氏は 2018 年に首長を退き，しばらく副長が代理を務めていたが，2019 年 5 月からアントニオ・トリフォリ（Antonio Trifoli）氏が首長になった．筆者はトリフォリ氏へ 2016 年にインタビューしたことがあり，当時はリアーチェで警察の任務にあたっていた人物である．トリフォリ氏の政策にも依るが，現在リアーチェでは，ルカーノ氏が交代したことで，③の関係はなくなったのかどうかは判断しにくい．また，図 3 のネットワークで，A にあたるグループのリーダーにあたる役割をトリフォリ氏が引き継ぐのか，あるいは別の人物や団体になるのかは，状況次第である．ただ，バランスを取るようにネットワークが遷移していくとすれば，ⓍまたはⓎになる可能性が高いので，今後観察を続けていきたい．

一方で，カミーニの場合は，当初ユンギ・ムンドゥがリアーチェモデルに沿った移民定住支援活動のためにカミーニに来て移民の受け入れを活発化させていったときは，④のように，ホスト住民からすればユンギ・ムンドゥはどこかから来た人たちという感じであったと想像する．そのあと，連帯ツーリズムの宿泊所として村全体にわたる空き家のリノベーションに着手したり，受け入れた移民に提供できる仕事の供給を，ホスト住民と良い関係を築いていくことで成し遂げていった（⑤）．やがてカミーニに来た移民はユンギ・ムンドゥのサポートを受けながらホスト住民と協働して経済的な基盤もできて暮らしている（⑥）といった，3 つのノードがすべて＋の最も良いバランスのとれた関係を作っている．ここで，リアーチェとの違いで特筆すべきことは，ユンギ・ムンドゥは非営利団体であって，コムーネの執行組織として政治には一切関わっていない点である．もちろん，コムーネの首長とユンギ・ムンドゥは常に交流していて活動の報告をしているであろうが，基本的にはユンギ・ムンドゥは活動のみをミッションとする．この政治との分離が，ホスト住民との友好関係を持続的にしているのではないかと考えられ，カミーニでの 3 ノードネットワークはバランスのとれた状態が保たれていくと思われる．

5. リアーチェにおける連帯ツーリズムの持続可能性

本稿では，リアーチェにおける社会ネットワークについて，隣接するカミーニでのケースとも比較しながら論述してきた．連帯ツーリズムを持続的に機能させるには，ボランティア活動のインセンティブの喚起や，達成感の高いプログラムの充実など，コムーネ全体で訪問客であるボランティアを受け入れる体制が求められることや，活動においてボランティアがサポートするという一方向だけではなく，サポート対象の移民住民もボランティアと一緒に活動するといった，相互性と双方向性が必要と考えられる．その点において，連帯ツーリズムは一つの手段ではあるが，リアーチェモデルにある多文化共生社会と，連帯ツーリズムの達成目標が合致しているため，共生社会を持続可能にしていくための一つとして連帯ツーリズムを仕掛けることには意義がある．

前章で説明した社会ネットワークを，連帯ツーリズムでのボランティアも入れて，ネットワークとして表すと図 4 ボランティアによる連帯ツーリズムの課題のようになり，ノード D がボランティアである．3 ノードから 4 ノードへ拡張することは，文献[11]でも述べられており，バランスあるいはアンバランスの判定は，考えられるすべての 3 つ組のノードに分解して考えて，1 つでもアンバランスな 3 ノードがあれば，ネットワーク全体でアンバランスであるとする．

図 3 では，リアーチェの現状は A と C がうまくいっていないのかまだ分からないということで「－」を付しているが，それについては今後調査を続けることにして，図 3 の③のネットワークにボランティアのノード D を加えると図 4 の左のネットワークになる．便宜上中央に配置しており，位置関係は特に重要ではない．ここで，すべてのエッジが「＋」であれば，連帯ツーリズムは持続可能に機能していくと思われる．この場合は活動団体とホスト住民との関係が良好であることであり，前章のカミーニの場合を参考に，リアーチェにおいても連帯ツーリズムの推進団体は，コムーネの政治つまり長にあたる人物とは分離するべきである．また，右上のような 2 つのネットワークにならないように，ノード A の推進団体のリーダーシップが大変重要になるであろう．これら 2 つのネットワークは，ホスト住民がボランティアを受け入れない場合と，ホスト住民と移民との間で亀裂が入ってしまう場合である．他の場合も考えられうるが，本稿ではこれら 2 つの場合について示した．

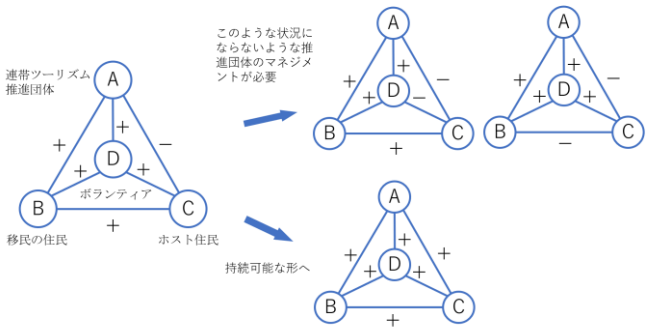

図 4　ボランティアによる連帯ツーリズムの課題
（筆者作成）

そして，連帯ツーリズムが持続可能に機能するには，図 4 で示した 4 つのノードの中ですべてのノード間で双方向性が成り立つことであると考えられる．双方向性とはお互いの役割を分担できる関係を保つことであり，例えば A の推進団体メンバーを B・C・D の人々が入って活動することや，D のホスト住民が提供するボランティアのための宿泊所なども，ボランティアや移民自らが将来的に運営したりできることである．

6. おわりに

2017 年を境に，イタリアの政情変化により，リアーチェにおける多文化共生社会の状況は暗転しつつある．筆者が 2018 年夏に訪れたときには，政府からの移民への補助金の中止が長期化したことに抗議して，ルカーノ氏はじめアソシエーションのメンバーがハンガーストライキを実施していた．さらにルカーノ氏は移民への補助金に不正を行ったとして訴追されてしまった．リアーチェにはイタリア各地からこの状況を救おうと人々が集まってきていた．移民の支援を要求する人々がより団結を深め，日々デモが行われていた．その一方で，移民が徐々に流出し始めており，引き続き事態を注視していく必要がある．しかしながら，リアーチェにおける 20 年余りに及ぶ共生社会の取組は，リアーチェモデルとしてイタリアはもちろん，隣国フランスの小さな自治体にまで影響を及ぼしており，ルカーノ氏の功績は称賛に値する．そのため，リアーチェにおいて連帯ツーリズムが持続可能にうまく機能していくことを今後の研究調査を通じて注視していきたい．

謝辞　リアーチェおよびカミーニでの調査時にご協力頂いた現地の皆様に，謹んで感謝の意を表する．本研究は，科学研究費助成事業基盤研究 C「南イタリアリアーチェの多文化共生社会におけるコミュニケーションネットワークの研究」（課題番号 18K11788）の補助を受けて実施されている．

参考文献

[1] Sasso C.. Riace, Terra di Accoglienza. EGA-Edizioni Gruppo Abele. 2012.
[2] Rinaldi, A.. Riace il paese dell'accoglienza. Un modello alternativo di integrazione. Imprimatur. 2016.
[3] 宮島喬．多文化共生の問題と課題、学術の動向. 2009, 14(12), p. 10-19.
[4] Barillà, T.. Mimì Capatosta. Mimmo Lucano e il modello Riace. Rubbettino Editore. 2017.

ⓒ2020 Information Processing Society of Japan

[5] Heider, F.. Attitudes and cognitive organization. Journal of Psychology. 1946, 21, p. 107-112.
[6] Smith, V. L. and Eadington,W. R. (eds). Tourism Alternatives. Chichester:Wiley. 1992.
[7] Scheyvens, R.. Tourism for Development: Empowering Communities. Harlow: Prentice-Hall. 2002.
[8] Cartwright, D. and Harary, F.. Structure balance: A generalization of Heider's theory. Psychological Review. 1956, 63(5), p. 277-293.
[9] Harary, F.. On the notion of balance of a signed graph. Michigan Math. Journal. 1953, 2(2), p. 143-146.
[10] Davis, A. J.. Structural balance, mechanical solidarity, and interpersonal relations. American Journal of Sociology. 1963, 68, p. 444-462.
[11] Easley, D. and Kleinberg, J.. Networks, Crowds, and Markets: Reasoning about a Highly Connected World. Cambridge University Press. 2010, p. 119-152.

ⓒ2020 Information Processing Society of Japan